そうだ、きさいち植物園に行こう！

Let's go to Kisaichi Botanical Garden

5月 ～ 11月

ヒツジグサ

- 池や沼に自生するスイレン科の多年生水草
- 夏に5cm程の白い花が開き、夜は閉じる
- 名前の由来は未の刻（午後2時）に開花するところから

6月 ～ 9月

ミズキンバイ

- 池や沼の水中に生えるアカバナ科の多年生草本
- 直径2.5cm程の黄色い花が咲く
- 環境省レッドリスト2020の絶滅危惧Ⅱ類に指定

7月

ワタ

- 東アジア原産アオイ科の有用植物
- 5つの花弁は淡黄色で基部は暗赤色
- 種子の白い綿毛は木綿に利用される

7月 ～ 9月

ミソハギ

- 野原や山のふもと等の湿地に自生する多年生草本
- 仏花として人家でも栽培
- 花は赤紫色。同品種はエゾミソハギ

※気象状況により開花時期は前後します。現在の開花状況は植物園までお問い合わせください。

トピックス

「ハナハスエリア」がリニューアルオープン

2020年、当園の「ハナハスエリア」は、鳥獣による被害にあい、多くの品種を消失してしまいました。残った品種が12品種と少なく、一時はハナハスエリアの再開を断念することも考えましたが、他の植物園・研究施設等の温かい支援で貴重なハナハスの苗を提供いただき、再開に向けての一歩を踏み出しています。

これにより、当園に初めて導入する品種50種を含め、84品種96株が育ちつぼみをつけ始めています。当園で初めて育てる品種もあり、今年すべての品種が花を咲かせるかは分かりませんが、現在ハナハスエリアの一般公開に向け準備を進めています。

例年は多くのつぼみが次々と咲き、ハナハスエリアは1カ月くらい楽しむことができます。

ハスの花の寿命は3、4日で、朝に咲き昼に閉じるを繰り返し、その短い開花中に色や形を変えていきます。一般的には2日目が美しいと言われます。

リニューアルオープンしたハナハスエリアをぜひご覧いただき、お気に入りの品種を探してください。

東鴨巣（ひがしかもす）

白君子小蓮（しろくんしょうれん）

毎葉蓮（まいようれん）

誠蓮（まことはす）

大賀蓮（おおがはす）

白万万（しろまんまん）

大阪市立大学附属植物園（愛称：きさいち植物園）

- ☎891-2059　交野市私市2000（私市駅徒歩6分）　HP　https://www.sci.osaka-cu.ac.jp/biol/botan/
- 開園時間　9:30 ～ 16:30（入園は16:00まで）　休園日　月曜日（祝休日の場合は開園）
- 入園料　大人350円/中学生以下無料　駐車料　普通車500円/マイクロ1,000円

※65歳以上の交野市民は「植物園メイト」に登録すると入園料が無料になります。

いつかは指定登録されたい 文化財予備軍

機物神社の十六善神図

現在、市は市内にある古文書の調査・整理・保存を積極的に進めています。昨年行った調査の中で、倉治の機物神社が所蔵（大阪市立美術館に寄託）する仏教絵画「十六善神図（じゅうろくぜんじんず）」から、多くの歴史的事実が判明しましたので、次代の指定文化財候補として紹介します。

市内最古級の文化財絵画

この絵画は、大阪市立美術館学芸員の石川温子（いしかわあつこ）氏（中世仏教絵画の専門家）によれば、15世紀後半～16世紀前半の作風を示しているとのことでした。

市内には絵図などの文化財絵画がほとんど残っておらず、このうち中世に描かれた絵画はこの1点しかない貴重なもので、市内では最古の絵画であることが分かりました。

十六善神ってなに？

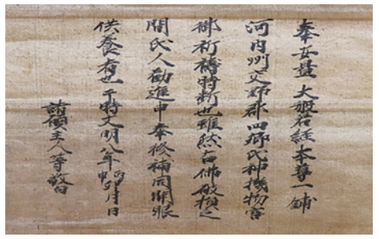
十六善神とは、大乗仏教の経典群「大般若経（だいはんにゃきょう）」を守る、四天王と十二神将を合わせた16人の神様のことです。このような絵画は、鎌倉時代～室町時代に多く描かれ、「大般若会（だいはんにゃえ）」と呼ばれる天下泰平や五穀豊穣、無病息災等を祈願する法要の際に、信仰の対象となる「本尊」として用いられることもあります。

絵画から分かる事実

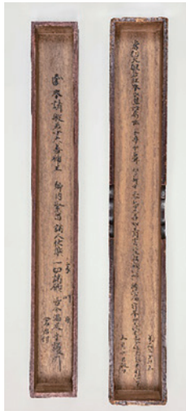
下の写真は絵画の裏に貼られていた文書です。文明8年（1476年）に書かれたもので、「河内国交野郡四郷の氏神である機物神社で、祈祷に使う本尊の十六善神図が破損したので、氏人（うじびと）（神社関係者）が寄付を募って修復した」という内容が書かれています。

機物神社の歴史は古く、建立された年代は分かっていませんが、この文書から少なくとも室町時代中期には存在していたという事実が分かります。また、「河内国交野郡四郷」の四郷がどこの地域のことを指すのかは不明ですが、少なくとも倉治地域以外に3つの地域の氏神であったことが分かります。

このような、複数地域からのあつい信仰により、十六善神図は修復されたのです。



木箱の記載にも注目



十六善神図が収められている木箱のふたの裏にも右写真のような文字が記載されていました。内容は、寛文3年（1663年）に木箱を新調したことや、この絵を神前に掲げて崇拝していたことが記載されており、また木箱の底の記載からは、倉治村の人々が機物神社とこの絵を信仰の中心としていたことが読み取れました。

室町時代中期から江戸時代前期まで約200年もの間、十六善神図に対する信仰はしっかりと受け継がれていたことが分かります。